月刊　教育情報誌

明日への学び

第　１８　号

２０１５年　１月２１日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

加速する教育改革
～次期指導要領改訂の方向性と大学入試改革の動向～

平成２５年１月から始まった教育再生実行会議では、いじめ対応についての第一次提言を皮切りに、教育委員会制度の見直し、大学教育と高大接続・大学入試の在り方、学制の見直しなどの点について次々と提言を行ってきました。それを受ける形で中央教育審議会でも議論され、様々な教育改革が加速しています。昨年からの教育改革の主な動きを下記にまとめてみます。

①道徳の教科化（平成２６年１０月２１日中教審答申）
②次期学習指導要領（英語教育も含む）の改訂（平成２６年１１月２０日中教審に諮問）
③高大接続・大学入試改革（平成２６年１２月２２日中教審答申）
④小中一貫教育学校の制度化（平成２６年１２月２２日中教審答申）
⑤幼児教育の無償化（来年度の無償化対象拡大は先送りされた）
⑥職業教育を行う高等教育機関の制度化（平成２６年１０月から有識者会議で検討中）
⑦チームとしての学校の在り方（平成２６年７月２９日中教審に諮問）

われわれ教員の日ごろの授業づくりに直結する内容としては、次期学習指導要領の改訂と大学入試改革があげられます。昨年１１月には、学習指導要領改訂に向けて、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問文が中央教育審議会に出され、１２月２２日には、中央教育審議会から、高大接続・大学入試改革に関する答申が提出されました。今号では、これらを読み解きながら、次期指導要領改訂の方向性を探り、キーワードとなっている「アクティブ・ラーニング」についても迫っていきます。また、知識偏重のセンター試験への対応に重点が置かれることで、現在行われている高校教育が、現代の多様な社会に耐えうるものになっていない、若者が社会に出るうえで必要な力を十分に身につけられていないとの指摘が多くあります。この点についても考えていきます。

「初等中等教育における…」と表題にあると、小中学校のことだろう、「大学入試改革…」とあると高校に関わることだろう、と感じてしまうかもしれませんが、実はこの２点は密接に関連しています。今回はすべての記事を「全教員向け」としてありますので、どの校種の先生も、なるべくすべての記事に目を通してください。いつもよりボリュームはありませんが、新しい年にあたり、進行していく教育改革について整理し、これからの授業づくりなどで考えるべきことを見つめる機会としてください。

＜目　次＞

○次期学習指導要領改訂の方向性	Ｐ　２	○派遣教員報告-熊本高校に派遣されている先生	Ｐ１０
○大学入試改革に向けた中教審答申の概要	Ｐ　４	○報告「中高授業改善事例に関わる公開授業⑥」	Ｐ１１
○今から考えていくべきこと	Ｐ　７	○おしらせ	Ｐ１２

全教員向け

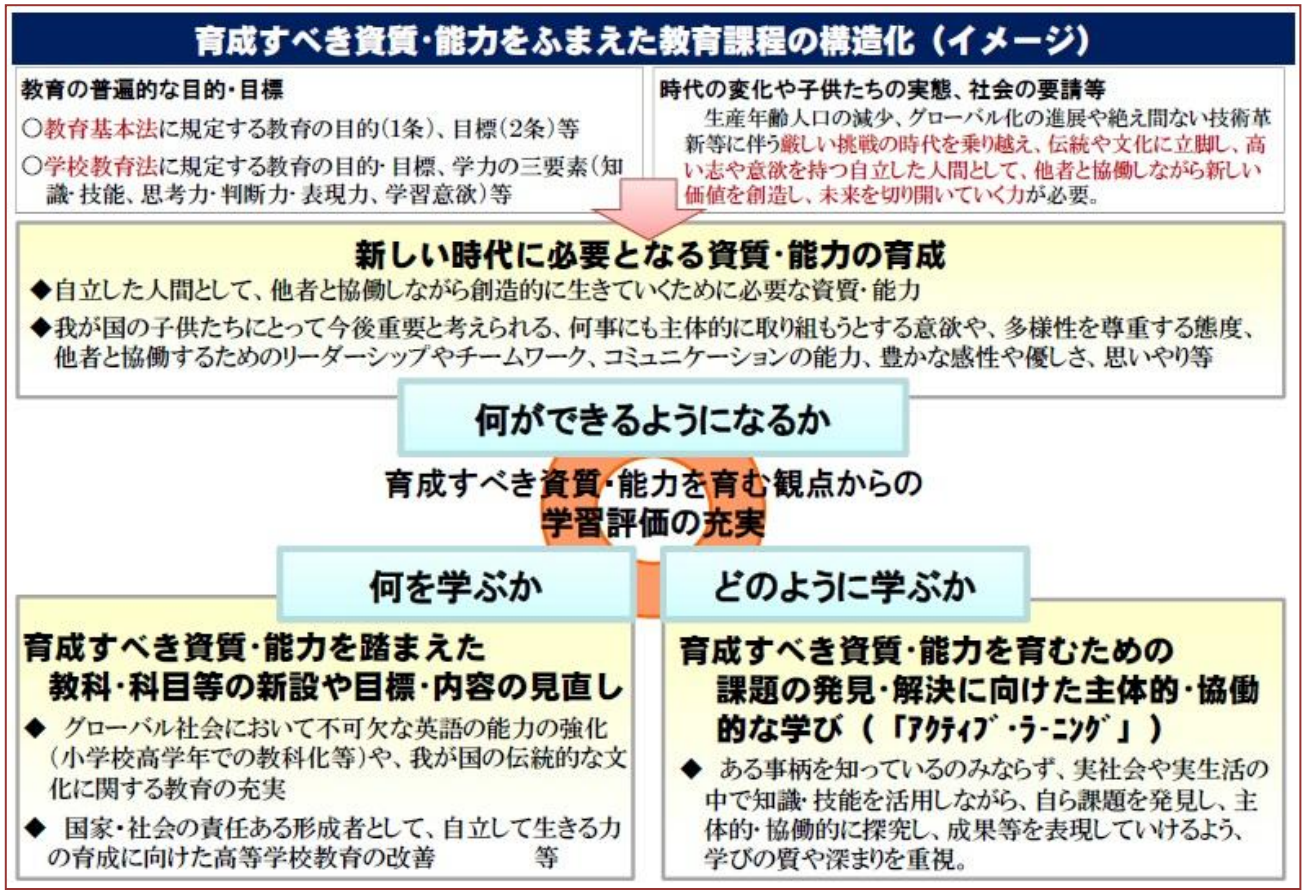
次期学習指導要領改訂の方向性

キーワードは「アクティブ・ラーニング」

平成２６年１１月２０日の中央教育審議会で、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」、下村博文文部科学大臣から諮問がありました。この諮問文や添付資料を読み解きながら、特に「育成すべき資質・能力」や「どのように学ぶか」に焦点をあて、次期学習指導要領改訂の方向性を探ります。

○急速に変化する時代に対応するために

諮問では、今後の社会変化について、「生産年齢人口の減少」「グローバル化の進展」「絶え間ない技術革新」をあげ、社会構造や雇用環境だけでなく、子どもたちが将来就く職業の在り方までが大きく変化していくと指摘しています。下の図表は、諮問文と同時に提出された概要資料から抜粋したものですが、その中でも、この「厳しい挑戦の時代を乗り越え、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら新しい価値を創造し、未来を切り開いていく力が必要」であると記されています。



○現行の学習指導要領の理念は基本的には継承

ご存知のように、現行の学習指導要領（平成２０、２１年改訂）は「『生きる力の育成』、基礎的・基本的知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等のバランス」にポイントが置かれています。

「生きる力」の理念は、その前の改訂（平成１０、１１年）から掲げられていますが、変化の激しい現代においても、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」からなるこの「生きる力」の理念は重要視されており、次期学習指導要領においても「普遍的」な扱いとなっています。さらに、教育基本法改正時に、学校教育法（３０条）で掲げられた「学力の三要素※1」についても同様であり、言語活動の充実や探究的学習が重要であることについても、方向性が大きく変化するわけではありません。

※1　学力の三要素については７ページを参照

ＯＥＣＤの「キー・コンピテンシー」とは

ＯＥＣＤはＤｅＳｅＣｏプロジェクトを組織して、その成果を２００３年に最終報告しました。そこでは「単なる知識や技能の習得を越え、共に生きるための学力を身に付けて、人生の成功と、良好な社会を形成するための鍵となる能力概念『キー・コンピテンシー』(ウィキペディアより)」を定義し、さらに次の３つのカテゴリーに集約しています

① 知識・技術などを相互作用的に活用する能力
② 多様な集団における人間関係形成能力
③ 自立的に行動する能力

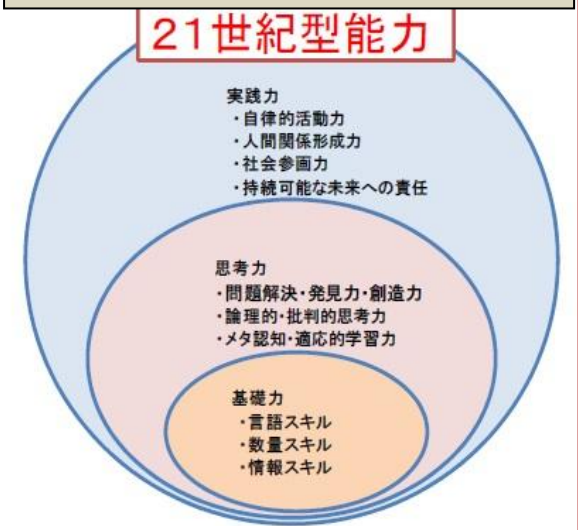
参照：文部科学省ＨＰ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/05111603/004.htm

○「育成すべき資質・能力」の明確化

現在、世界の潮流としても、ＯＥＣＤから出された「キー・コンピテンシー」（右参照）などを中心に、子どもたちの育成すべき資質・能力とは何であり、それを育成するにはどのような教育の在り方がいいのかが議論されています。日本では、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」が平成２４年１２月から２６年３月にかけて行われ、「育成すべき資質・能力」を明確化することが重要であるとし、さらにこの資質・能力について、次のような論点整理が行われています。

「今後育成が求められる資質・能力の枠組みについて、諸外国の動向や国立教育政策研究所の『２１世紀型能力（右図参照）』も踏まえつつ更に検討が必要」であるとしたうえで、「その際、自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成するため、例えば、『主体性・自立性に関わる力』『対人関係能力』『課題解決力』『学びに向かう力』『情報活用能力』『グローバル化に対応する力』『持続可能な社会づくりに関わる実践力』などを重視することが必要」であり、「また、我が国の児童生徒の実態を踏まえると、受け身でなく、主体性を持って学ぶ力を育てることが重要であり、リーダーシップ、企画力・創造力、意欲や志も重視すべき」「人としての思いやりや優しさ、感性などの人間性も重要」であるとしています。

「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる力を抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組み



国立教育政策研究所まとめ H25.3

○「どのように学ぶのか」は「アクティブ・ラーニング」がキーワード

諮問では、このような資質・能力を育むために、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要であるとしており、そのうえで、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる『アクティブ・ラーニング』）や、そのための指導の方法を充実させていく必要がある」としています。そして、現行指導要領で示されている言語活動や探究的な学習活動、社会とのつながりをより意識した体験的な活動等の成果を踏まえつつ、今後の「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方につ

いての審議をしていくよう要請しています。次期改訂では、この「アクティブ・ラーニング」がキーワードとなるようです。「アクティブ・ラーニング」については、６，７ページでさらに取り上げますので、参考にしてください。

「次世代型教育推進センター」の設置

１月９日付の毎日新聞では、文部科学省が「アクティブ・ラーニングの指導法を研究・開発する『次世代型教育推進センター』を新設する方針を決めた」と報じています。これによると、文部科学省所管の「教育研修センター」内に設置し、全国から指導力のある優秀な小中学校教員約１０人を専属スタッフとして配置するとのことです。

○「何を知っているか」にとどまらず「何ができるか（どのような力がついたか）」

さらに諮問では、「育成すべき資質・能力」を子どもたちに確実に育む観点から、「学習評価の在り方」の審議も要請しています。「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」でも、育成すべき資質・能力の学習評価について、「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるか」へと改善する必要があるとしています。加えて諮問では、「アクティブ・ラーニング」等のプロセスを通じて表れる、子どもたちの学習成果の把握方法や評価についても、審議の必要性が述べられています。

なお、この諮問を受けて、次期改訂に向けての作業が本格化します。今のところ、平成２８年に答申の予定となっています。

全教員向け

大学入試改革に向けた中教審答申の概要

教育再生実行会議と中央教育審議会で議論されてきた大学入試改革は、平成２６年１２月２２日に出された答申※2で、大枠が固まりました。今後は、具体的な制度設計に入っていくことになります。その答申の内容から、大学入試改革についてまとめます。なお、この答申は、大学入試改革に関わるものがマスコミ等でも大きく報道されていますが、実際には、高校教育、大学教育と合わせた一体改革についての提言となっていますので、そのことを踏まえたうえでお読みください。

○高大接続改革が目指す未来の姿

答申※2の冒頭の「高大接続改革が目指す未来の姿」には次のような一節があります。

> 将来に向かって夢を描き、その実現に向けて努力している少年少女一人ひとりが、自信に溢れた、実り多い、幸福な人生を送れるようにすること。
>
> これからの時代に社会に出て、国の内外で仕事をし、人生を築いていく、今の子どもたちやこれから生まれてくる子どもたちが、十分な知識や技能を身に付け、十分な思考力・判断力・表現力を磨き、主体性を持って多様な人々と協働することを通して、喜びと糧を得ていくことができるようにすること。
>
> 彼らが、国家と社会の形成者として十分な素養と行動規範を持てるようにすること。

このような未来の姿を記したうえで、さらに、生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の厳しい時代に通用する力を育むためには、新たな時代を見据えた教育改革が必要であることを提唱しています。

※2 答申の正式名称は「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について　～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」
文部科学省ＨＰ　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm

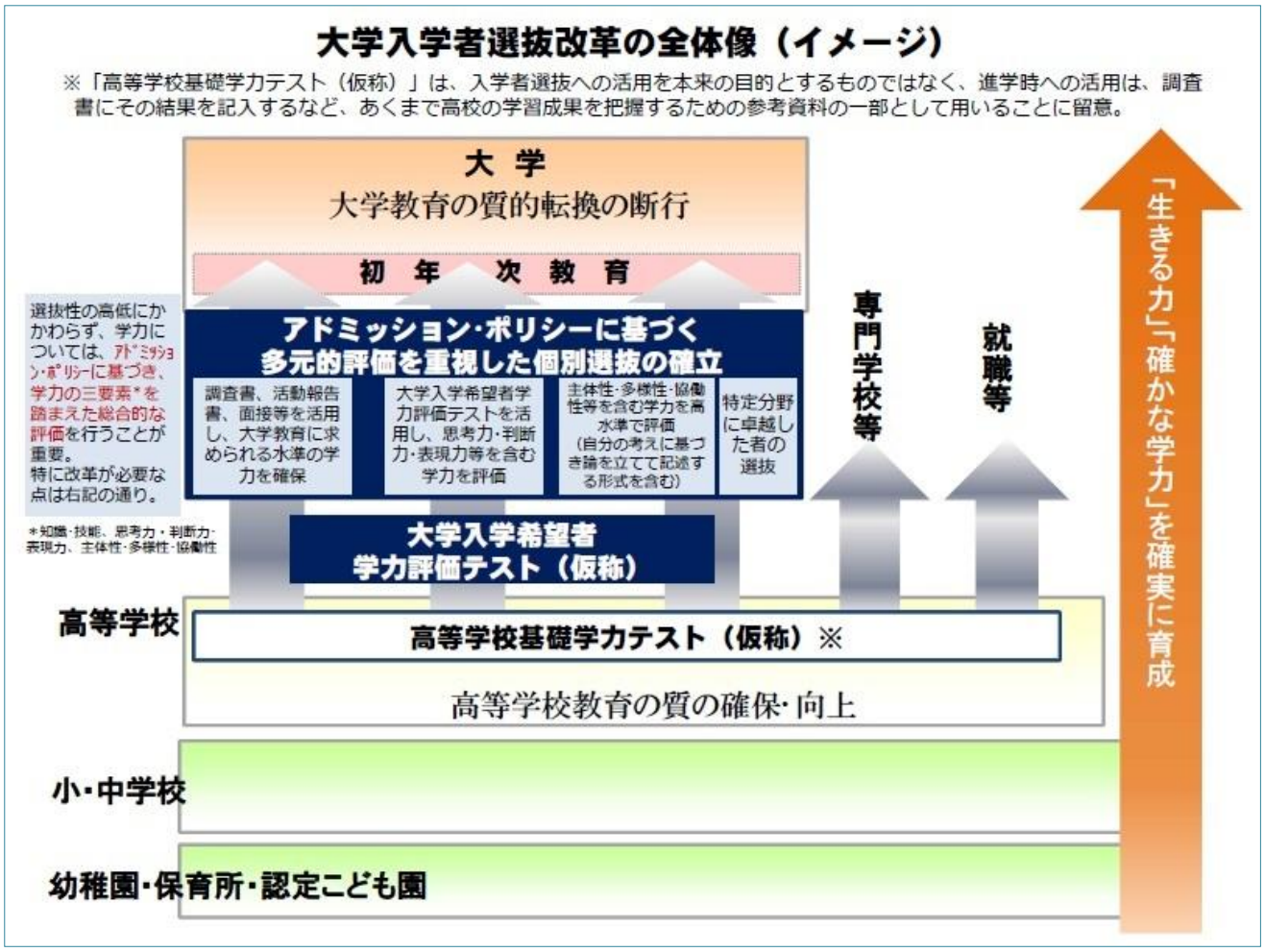
○小中学校教育の成果と高校教育の改革が進まない現状

平成１９年の学校教育法改正により、いわゆる「学力の三要素※1」からなる「確かな学力」の育成が重要であることが明確に示され、特に小・中学校では、これらを踏まえて多くの実践が重ねられてきました。全国学力調査で「Ｂ問題」が出題されるようになったことも、少なからず授業改善に影響を与えてきました。これらの成果は、全国学力調査だけでなく、ＰＩＳＡの結果にも表れてきています。一方、高校では、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまる傾向があり、学力の三要素を踏まえた指導が浸透していないという課題があります。この背景については答申でも詳しく述べられていますので、参考にしてください。

そして、大学入学者選抜については、知識の記憶力などの測定しやすい一部の能力や、選抜の一時点で有している能力の評価に留まっていたり、丁寧な評価よりも学生確保が優先されたりするなど、高校で培ってきた力や、これからの大学教育で学ぶために必要な力を評価するものとなっていないという現状について、答申で指摘しています。

○大学入学者選抜方法改革の概要

（答申時の別添資料２）



前ページには、答申時の資料（別添資料２）として出された「大学入学者選抜改革の全体像（イメージ)」を掲載しました。この表からも、「学力の三要素」を踏まえた評価を目標にしていることがうかがえます。さらに、答申にある大学入学者選抜の改革点について下に抜き出します。

◆教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称)」を導入する。
◆現行の大学入試センター試験を廃止し、大学で学ぶ力のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する「大学入学希望者学力評価テスト（仮称)」を導入し、各大学の活用を推進する。
◆各大学が個別に行う入学者選抜については、学力の三要素を踏まえた多面的な選抜方法をとるものとし、特定分野において卓越した能力を有するものの選抜や、多様な背景を持った学生の受け入れが促進されるよう、具体的な選抜方法等に関する事項を、各大学がその特色等に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化する。

○新テストの概要

答申で提言されている２つの新しいテストの在り方について、答申時の資料（別添資料３）を右に掲載します。

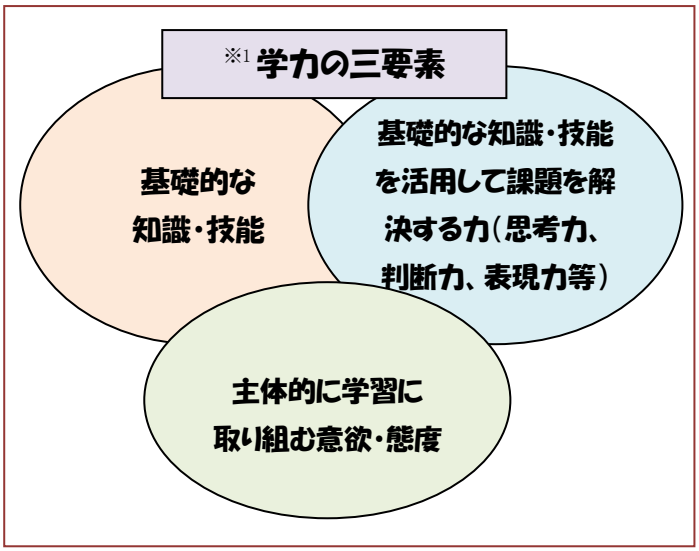
この表の情報から、２つのテストの大枠はとらえられますが、現場で指導する教員にとっては、さまざまな疑問が浮かんできます。たとえば、「合教科・科目型」「総合型」の問題とはどんなものなのか、思考力・判断力・表現力についてはどう評価するのか、などの点は、なかなかイメージできず、戸惑ってしまうでしょう。この２点については、答申時の資料（別添資料４と５※3）が参考になると思います。

また、「ＣＢＴ方式※4」といっても簡単には導入できないのではないか、記述式を導入して膨大な量の採点は本当に可能なのか、あるいは、両テストとも「複数回実施」としているが、現在でも忙しい高校生活の中に組み込むことが本当にできるのか、などの疑問も次々と浮かんできます。現段階では今後の検

総称	学力評価のための新たなテスト（仮称） 別添資料３	
実施主体	大学入試センターを、「学力評価のための新たなテスト（仮称)」の実施・方法開発や評価に関する方法開発などの支援を一体的に行う組織に抜本的に改組。	
個別名称	高等学校基礎学力テスト（仮称）	大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
目的・活用方策	○生徒が、自らの高等学校教育における学習の達成度の把握及び自らの学力を客観的に提示することができるようにし、それらを通じて生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図る。 <上記以外の活用方策> ○結果を高等学校での指導改善にも生かす。 ○進学時や就職時に基礎学力の証明や把握の方法の一つとして、その結果を大学等が用いることも可能とする。 ※進学時の活用は、調査書にその結果を記入するなど、高等学校段階の学習成果把握のための参考資料の一部として使用。	○大学入学希望者が、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握する。「確かな学力」のうち「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力（「思考力・判断力・表現力)」を中心に評価。
対象者	○希望参加型 ※ できるだけ多くの生徒が参加することを可能とするための方策を検討。	○大学入学希望者 ※ 大学で学ぶ力を確認したい者は、社会人等を含め、誰でも受験可能。
内容	○実施当初は「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」等の高校の必履修科目を想定（選択受検も可能)。 ○高等学校で育成すべき「確かな学力」を踏まえ、「思考力・判断力・表現力」を評価する問題を含めるが、学力の基礎となる知識・技能の質と量を確保する観点から、特に「知識・技能」の確実な習得を重視。 ※高難度から低難度まで広範囲の難易度。 ○各学校・生徒に対し、成績を段階で表示 ※ 各自の正答率等も併せて表示	○「教科型」に加えて、教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせて出題。 ※ 将来は「合教科・科目型」「総合型」のみによる「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の総合的な評価を目指す。 ※ 広範囲の難易度。特に、選抜性の高い大学が入学者選抜の評価の一部として十分活用できる水準の高難易度の出題を含む。 ○大学及び大学入学希望者に対し、段階別表示による成績提供
解答方式	○多肢選択方式が原則、記述式導入を目指す。	○多肢選択方式だけでなく、記述式を導入。
検討体制	○ＣＢＴの導入や両テストの難易度・範囲の在り方、問題の蓄積方法、作問の方法、記述式問題の導入方法、成績表示の具体的な在り方等について一体的に検討。	
実施方法	○在学中に複数回（例えば年間２回程度)、高校２・３年での受験を可能とする。 ○実施時期は、夏～秋を基本として、学校現場の意見を聴取しながら検討。 ○ＣＢＴ方式での実施を前提に開発を行う。 ○英語等については、民間の資格・検定試験も積極的に活用。	○年複数回実施。 ○実施回数や実施時期は、入学希望者が自ら考え自ら挑戦することを第一義とした上で、高校教育への影響を考慮しつつ、高校・大学関係者を含めて協議。 ○ＣＢＴ方式での実施を前提に開発を行う。 ○特に英語は、四技能を総合的に評価できる問題の出題や民間の資格・検定試験を活用。 ※ 他の教科・科目や「合教科・科目型」「総合型」についても、民間の資格・検定試験の開発・活用も見据えて検討。
作問のイメージ	全国学力・学習状況調査のＡ問題(主として知識に関する問題)及びＢ問題(主として活用に関する問題)の高校教育レベルの問題を想定	知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を表現するための力を評価する、PISA 型の問題を想定

討状況に敏感になるしかないようです。

答申では、新テストが実施されることで「多様な挑戦の機会が与えられる一方で、いたずらに選抜が早期化・複数化することにより、高校教育の本来の目的が大きくゆがめられる危惧もある」としており、この点については、「適切なルールの下での入学者選抜全体の多面的・総合的な評価への転換を図るため、一般入試、推薦入試、ＡＯ入試の区分を廃止する」「大学入学者選抜全体の共通的な新たなルールを構築するために、大学入学者選抜実施要項を抜本的に見直す」としています。



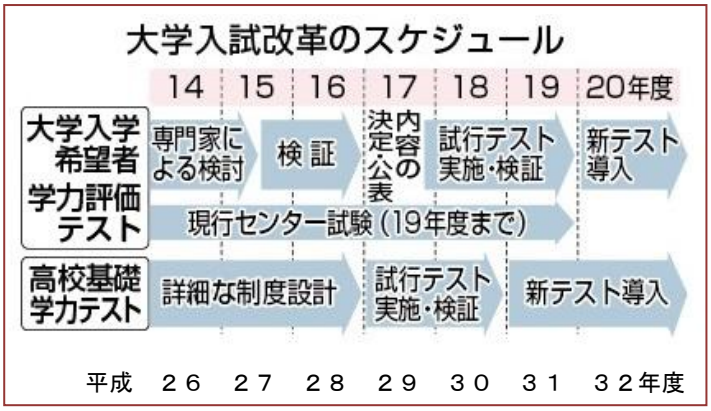
※3「別添資料４と５」については、本情報誌に掲載していません。５ページにも掲載した下記の文部科学省ＨＰを参考にしてください。　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm

※4　ＣＢＴはComputer Based Testing の略。コンピュータを利用して実施する試験方式のこと。

○新テスト実施に向けてのスケジュール

大きな流れは、右表のとおりです。

答申では、「新テストについて早急に専門家委員会を立ち上げ、対象となる教科・科目、『教科型』『合教科型』等の具体的な枠組み、ＣＢＴ方式の導入方法などを含めた諸課題について、答申後１年をめどに結論を得ること」、「思考力等を問う問題や合教科型等の問題について、平成２８年度中に作問イメージを公表すること」としています。



時事通信ドットコムより

全教員向け

今から考えていくべきこと

前記２つの諮問や答申を踏まえ、これから考えていくべきことを整理してみます。

○大学入試改革は完全に動き出している

前述したように、大学入試改革はもう答申の段階まで来ており、平成３２年度からの新テスト導入を打ち出しています。これまでも、マークセンス方式の大学入試センター試験の弊害はいろいろなところで指摘されていましたが、長年、改革に踏み込むことができませんでした。しかし、今回は、今までできなかった段階を超え、中教審が答申を出すところまで来ました。これからの制度設計や、財政的な部分での障壁など問題は山積しており、実施までの議論の中で妥協点が増えていく

可能性はありますが、答申の方向に沿ったなんらかの改革が行われることは間違いない段階まで来ています。大学入試改革の内容を見ると、「そんなことが現実的にできるのだろうか」と感じる高校の教員は多いと思いますが、もう黙って見ているだけでは済まない状況まで来ているのです。

○産業界からの強い要請？　教育の理想に近づく？

本情報誌第１３号でも「子どもたちの夢や希望と勤労観・職業観を育む」というテーマで、キャリア教育について取り上げました。近年、学校教育と社会との接続段階で壁を越えられない若者が増えており、キャリア教育の重要性が唱えられてきました。現在もその重要度は高く、キャリア教育の推進については、引き続き様々な場面で議論されています。その上で、次の議論として、大学教育改革、大学入試改革、高校教育の改革へと流れてきているようです。このことは、キャリア教育に端を発した、企業経営者等、産業界からの強い要請があることがうかがえます。

さてわたしたち教員はどうでしょうか。たとえば、「進学校」と呼ばれる高校では、保護者や地域からの要請もあり、国公立大学や難関大学に生徒たちを入学させることに力点がかけられているのが現状です。ところが一方では、大学入試で子どもたちの力をすべて測るような社会の在り方に不満も持っている一面もあります。実際の教育現場でも、学校行事や部活動を含めた教科教育以外の人間教育的側面も重要視しています。特に小中学校では、勉強に限らず、「しっかり鍛える」ことが福井の教育の特長としてあげられており、今や全国的にも、福井の教育の大きな成果としてとらえられています。

今回の大学入試改革は、現代社会のグローバル化への対応に加え、高校、大学から、社会に接続するうえでの必要な力を大学入試で測ろうという意図が働いています。教員がイメージする理想の教育に明確な定義があるわけではなく、教員一人ひとりに差があるとは思いますが、少なくとも、これまで大学入試を意識した教育と理想とにずれがあった部分が、少しずつ近づく方向に流れてきている、と前向きにとらえるべきではないでしょうか。

○「アクティブ・ラーニング」とは

ここで、次期学習指導要領の改訂の中で、キーワードとして注目されている「アクティブ・ラーニング」に目を向けてみましょう。

福井大学附属中学校では、２０年ほど前から、授業中の生徒の活動に視点を置いた授業づくりに取り組んでいます。また福井県小学校教育研究会や中学校教育研究会でも組織的にこのような実践に取り組むようになり、その流れは、「協働」という言葉ともに福井県全体に広がっています。また近年は、福井大学教職大学院がスタートし、現職の先生方が、在籍校にいながら大学院で学ぶ、福井特有の学校拠点方式により、このような実践が大きな広がりを見せています。そのため、「今さらアクティブ・ラーニングと言われても…」という感覚をもつ方々も多いのではないでしょうか。他県の状況と単純な比較はできませんが、文部科学省がこれから進めようとしているアクティブ・ラーニングの意図を汲んだ授業づくりが、福井では、すでに研究・実践されてきていると考えられます。

それでは、これまで同様の感覚で授業研究を行っていけばいいのか、と吟味してみると、見落としてはいけないことがあります。

「アクティブ・ラーニング」

過去に出された中教審答申の用語解説を紹介します

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修※者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

※平成２４年８月２８日『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』－大学教育に関する答申であったため「学修」という表現が使われていると推測されます

○教授法が重要なのではなく、どのような力がついたかが重要

２ページの図表をもう一度見ていただければ明らかですが、今回の改訂の方向性では、①「新しい時代に必要となる資質・能力」について明確化し、②そのために何を学び、③どのように学ぶか、という点がポイントとなっています。つまり私たちは、明確化された「資質・能力」を育成するため「③どのように学ぶか（どう授業をつくっていくか)」を考えることが大切になります。

これまで福井県でも研究されてきた「協働的な学習」については、「アクティブ・ラーニング」の流れと大きく異なるものではありませんが、「協働的な学習」の結果もたらされる教育目標が、時代とともに変化していることを見落としてはいけません。知識・技能の習得だけではなく、「これからの時代に必要な力」を育むことを目標に置けば、必然的に、協働的な学習やアクティブ・ラーニングの流れをくむ授業を取り入れていくことになるはずです。つまり今回の改訂の流れとしては、「『アクティブ・ラーニング』を取り入れなさい」ではなく、「○○という資質・能力をつけるために、『アクティブ・ラーニング』を用いるべきである」という方向性が出されていることを見落としてはいけないのです。

「学習者主体の授業づくり」については、本情報誌第１４号で取り上げていますが、「グループ学習をしたから学習者主体の授業になるわけではない」ことと同様、アクティブ・ラーニングを取り入れさえすればいいのではありません。時代とともに教育目標が少しずつ変わっていることと、教授法が重要なのではなく「授業の結果、目標とすべき力がついたか」が最も重要であることを強く意識しなければなりません。

○この教育改革は高校だけの問題ではない

大学入試改革に話を戻しますが、ここで念頭に置くべき点は、現在の小学校６年生以下の子どもたちは、新しい大学入試制度にしたがって大学受験をするということです。実際の次期学習指導要領改訂の詳細な議論は今から始まります。中教審の今後の審議予定を見ると、答申が出されるのは、平成２８年度の予定です。過去の改訂サイクルから考えると、次期改訂は平成３２～３３年度あたりになります。この時期は、ちょうど大学入試の新テストが導入されている時期にあたります。つまり、大学入試改革と次期学習指導要領改訂は密接な関係があるといっても、現在の小学生は、ほとんどが現行指導要領のまま学習し、新しい大学入試システムのもとで受験することになるのです。

○２つの動きを注視して、今から考えていくべきこと

次期改訂と大学入試改革の二つが、同じ方向を向いて進んでいることを考慮すると、大学入試改革が先行している現状を見逃すわけにはいきません。つまり、次期学習指導要領が改訂されてから動き出すのでは対応に後れを取ることになります。教育委員会や管理職が、文科省や中教審の動きに注目していかなければならないことは言うまでもありませんが、実際に現場で指導する教員も、子どもたちに今後必要になる「資質・能力」について敏感でいるべきで、これらの力の育成に向けた「アクティブ・ラーニング」はどうあるべきか、考えていかなければなりません。「アクティブ・ラーニング」を行うためには、それぞれの教員が土台となる知識や情報を吸収していく必要がありますが、日ごろから目の前の子どもたちの対応に追われている現状もあり、教員それぞれの研鑽と同時に、組織的な動きが大切です。教える内容にどのような強弱をつけるのか、「アクティブ・ラーニング」を取り入れた授業研究体制どう整えていくのか、校長のリーダーシップのもと、考えていく必要があります。「どのように学ぶか」は、もう現在のこの時期から、次期学習指導要領改訂や大学入試改革の方向性を強く意識して、取り組んでいかなければなりません。

連　載　「派遣教員インタビュー」⑤ ～冨田教諭～

平成２６年度は、福井県の先生５名が、他県（東京事務所を含む）で勤務されています。今回は熊本県立熊本高校に派遣されている冨田秀明先生のインタビューです。

○熊本高校での勤務内容

冨田秀明先生

１年生２クラスの副担任で、進路部に所属しています。英語科は完全横持ち制なので、一つの学年の授業しか担当できません。私は１年生の５クラスを担当しています。英コミⅠ（３単位）を２クラス、英表Ⅰ（２単位）を３クラスです。計１２単位は少なく感じますが、熊本高校の１単位は６５分間、つまり、５０分授業に換算すると１６単位相当になります。６５分もの長時間、生徒を集中させるような授業の準備は大変なので、最初はその単位数以上に負担を感じていましたが、生徒の反応も良く、授業が盛り上がるので、６５分はあっという間で楽しいと感じます。ただ、各クラス完全に分け持ち制（１クラスを複数の英語教員で科目別に分けて担当）なので、教えにくい面もあります。

○印象に残っている三つのこと

①学校内模試

一番苦しめられましたが、一番勉強にもなりました。年５回実施され、各教科とも練りに練ったオリジナル問題を作成します。当然、大学入試の過去問や業者の模擬試験からの改題はＮＧです。英語科では、和訳がまだ出版されておらず、インターネットにも流出していない素材からネタを探さないといけません。さらに、問題を作成しても、厳しい検討委員会に諮られ、一からやり直しというケースも珍しくありません。ベテランの先生でも平均５回は提出し、やっと合格がもらえるそうです。私は今年度、総合問題と要約を担当しましたが、先の見えない闘いに自分を見失いそうになるという感覚を、教員になって初めて味わいました。問題作成にかけた時間はそれぞれ 200 時間以上。切迫した状況で強制的に原書を読むので、もちろん力はつきます。いつの間にか、難解な原書を読むのが楽しみになってきました。

②合同進路検討会

７月と１２月の年２回行われます。前述の校内模試の成績を中心に、４日間かけて、400 人の生徒全員の志望校を検討します。参加者は３年担任団と進路部員が必須で残りは希望者ですが、ほぼ全員参加されます。福井県（武生高校）と大きく異なるのは実施時期です。７月にここまで密度の濃い検討会をするのは、夏休みの学習に確固たる道標をつけるためです。検討会で話し合われた内容を、担任団は夏休み直前の三者面談に反映させ、生徒に助言します。センター後には検討会はありません。ほとんどの生徒が１２月の検討会で出願校を決めてしまうからです。熊高では、生徒も教員もセンターの結果に左右されず、第一志望を出願校として貫くのです。その結果、浪人は多くなります（半分程度）が、来年度期待できるので問題ないという考え方です。

③巡回面談

１・２年生対象で、科目選択の時期（１０月の１か月間）にあります。面談は担任の先生だけというのが普通だと思いますが、熊高ではクラスの枠を解き放ち、担任以外の先生にも相談できることがシステムとして出来上がっています。教科担任でも先輩おすすめの先生でもいいのですが、完全アポ制なので、人気のある先生はすぐに予約でいっぱいになってしまいます。したがって、生徒たちは我先に予約を取りに行きます。この期間、職員室は面談の熱気で満ちあふれています。面談の内容は教科選択の話にとどまらず、人生相談にまで発展することも多々あります。有益な情報だけでなくやる気も得られるので、生徒にとって大きなメリットがあるシステムです。ちなみに、熊高の文理分けは３年生からです。

上記の三つは大変有益ですが、時間も労力も教員側の負担が大きいので、福井での導入は難しいかもしれません。熊高では大半の教員が、特に行事等がなければ１７時に帰宅します。それなのに、なぜこの時間を捻出できるのでしょうか。まず圧倒的に会議が少ないです。職員会議は年に３回（学期に１回）で２０分程度。教科会や校務分掌の会議は時間割に組み入れられていません。学年会は隔週の実施です。熊高の教員は徹底して無駄な会議を省こうとします。管理職も１７時帰宅を強く勧めます。組織ぐるみで上手に時間を工面しているのです。決して仕事嫌いの集団ではありません。その証拠に、本質的な教員の仕事（教材研究や面談）には時間をかけても文句を言いません。これらがうまく機能して、大学進学実績において西日本を代表する名門公立高校になれたのでしょう。

公開授業 報　告

中高の接続に焦点を当てた授業で

中高授業改善交流会（国語）が行われました

Ｈ２６．１０．３０　於：福井市至民中学校

□公開授業

・授業者 竹林 史惠 教諭　・授業クラス ３年１組　・参観者 合計１６名

－授業者が選定した和歌を三大和歌集に分類する授業－

出典を示さずに選定した６首の和歌を、三大和歌集の特徴を手がかりにして歌集ごとに分類することで、「根拠をもって読むこと」を大切にする高校の授業につなげる

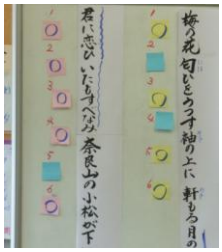
授業の様子

グループ活動の様子

中学３年生の「和歌の魅力を伝え合おう～時代の違う和歌を詠み比べ、それぞれの魅力を探る」の単元で、生徒たちは前時までに三大和歌集の代表作を数首ずつ読み、それぞれの歌集の特徴や歌風を学習しています。

本時では初めて出会った６首の和歌の意味や特徴をつかみ、その和歌がどの三大和歌集に入っているのかを予想し、分類しました。グループで話し合いをして個人の意見をまとめ、ホワイトボードに色付箋を貼って発表しました（赤：万葉集、青：古今集、黄：新古今集）。生徒たちは和歌に使われているキーワードや和歌から感じ取ったイメージなどを根拠にして、なぜその和歌集に分類したのかを自分の言葉で説明していました。なかなか分類ができない生徒のために「ヒントカード」が準備されていたり、それぞれの和歌集の特徴を色別にまとめた掲示をされたりするなど、各所に細やかな配慮や工夫がなされており、生徒たちも意欲的に活動に取り組んでいました。

ヒントカード


班の予想を色付箋で表す

□授業者と参観者のコメント

＜授業者のコメント＞　和歌を歌集ごとに分類することはかなり難しいが、生徒の発想や和歌に対するイメージを大切にしたいという思いが強く、１つ１つの言葉に注目して分類した理由を説明できるようにと伝えた。国語が苦手な生徒から「先生の話を聞いて、本当にこれが万葉の和歌だということが分かった」「自分は正解ではなかったが、友達や先生の話を聞いて納得した」「グループ活動で和歌の勉強をしてワクワクした」などの感想が出され、新しい取組みではあったが生徒の力や意欲を引き出すことができたのではないかと思う。

＜高校教員＞

私の古典の授業はほとんどが暗記、一斉授業です。古典を面白いと思わせるには、今回の授業のように自分でのびのびと考える時間が必要だと感じた。また、意味を大事にしている高校の授業とは違って、感じ方を大切にしているところに感心した。／和歌の特色を暗記して分類するのではなく、イメージを広げ根拠と照らし合わせていく学習活動は、高校では十分にできず、どうしても機械的になりがちです。中学校段階でこのような学習経験をもった生徒は高校でも豊かに学べると思う。／中学校の指導要領では古典を味わうことに重点がおかれ、原文と訳が同時に与えられるスタイルが普通だと思っている生徒にとって、高校での古典文法は未知の世界で、甚だしい努力を強いられている。中学と高校のギャップがかなり大きいと感じた。／高校生に徹底することは「国語を根拠を持って読むこと」と「予習することの大切さ」です。中学校でも今日の授業で徹底されていた「文中の根拠」を生徒に浸透させて欲しいと思う。

＜県外からの派遣教員＞

「活動あって学びなし」という話がありましたが、まさに私の悩みでもあります。授業を見せていただき、古典でも「生徒が主体的に読む」「読むことを通して身につけさせたい力を教師が明確に持つ」ことが大切だと感じました。／福井では中高接続を意識して中高の先生方が相互に授業参観を行っているところが素晴らしいと思います。先を見通した授業づくりをしていくことで、さらに学力向上を図ることができるのだと感じました。／先生が話しすぎず、上手く生徒の活動をコーディネートしていたと感じました。また、生徒主体の授業でありながら、しっかりとした学びがあり、生徒たちの意見のまとめかたも素晴らしかったです。

〈教育研究所 冨澤宏二主任の助言〉

古典は生徒たちにとってなじみが薄く、学習意欲が持てない分野だと言われる中、今回の取組は生徒たちに楽しい古文の学習を経験させる優れた試みであった。和歌の分類という活動は、生徒の興味・関心をかき立て、積極的に授業に参加できるとともに、それぞれの和歌の表現に注目しなくてはいけないので、自然と作品を丁寧に読むことにつながる試みであった。生徒たちは班の中で、「感情がストレートに表現されているから万葉集だ」「ロマンチックな歌だから古今集じゃないの」などと、根拠を歌の中の言葉に求めて自分の意見を発言できていた。高等学校での本格的な古文学習を前に、生徒が古典の世界に興味関心を高める、高校での学習につながることを意識した内容であった。今回、高等学校からの参観者も多く、中学校でどのような授業を実施しているのかという理解も深まったと思われる。

※この授業の様子は、教育情報フォーラムでも公開中です。

参考図書

■山崎正和「大停滞の時代を超えて」中公叢書（採用内定者研修図書）

革命と戦争の時代だった二十世紀が過ぎ去り、二十一世紀にはいって十年余り。人びとは政治的にも社会的にも手詰まり感を覚え、自分の立ち位置の決めにくさに苛だちがちになっている。閉塞感に覆われた大停滞の時代を過ち少なく生き延びるために、我々は何をなすべきか。人類の文明史を一貫した流れとして捉える壮大な歴史理解を踏まえ、現在目の前に起こりつつある事象の本質を解き明かし、次代への指針を示す評論集。(Amazon ウェブサイトより)

■大西泰人「１億人の英文法」東進ブックス（採用内定者研修図書）

日本人の英語を本気で変える。大西泰斗教授が魂を込め，約３年もの長い年月をかけてようやく完成した超大作。「話せる」英語を「最速」で達成するための文法書ということで，膨大な量の知識をこの 1 冊にすべて収録してはいますが，最初から読んで一気に読破できるよう，読みやすさ，面白さ，構成，レイアウトなどに様々な工夫が施されています。文法に時間をかけてはいけません。英語のシステムを最も「カンタン」に解説した本書で，英語を話すための基礎を「最速」で身につけてください。(出版社のコメント Amazon ウェブサイトより)

■中谷宇吉郎「雪」岩波文庫（採用内定者研修図書）

天然雪の研究から出発し，やがて世界に先駆けて人工雪の実験に成功して雪の結晶の生成条件を明らかにするまでを懇切に語る．その語り口には，科学の研究とはどんなものかを知って欲しいという「雪博士」中谷の熱い想いがみなぎっている．岩波新書創刊いらいのロングセラーを岩波文庫の一冊としておとどけする．　（解説　樋口敬二　Amazon ウェブサイトより）

芦泉荘からのお知らせ

～ 源泉掛け流しの温泉とお部屋でゆったりお食事を
ご友人、ご家族の旅行、送別会に是非ご利用ください。～

● ご予算に合わせた各種プランをご用意 ●

☆「青葉」1泊2食付 平日　8，300円
☆「杣山」1泊2食付 平日 10，100円
☆「文殊」1泊2食付 平日 11，900円
☆「足羽」1泊2食付 平日 14，900円
★ ヘルシー美食プラン 平日 10，500円

1万円以上のプランをご利用の場合、宿泊利用補助券2,500円をお1人様につき2枚同時にご使用になれます。また、教職員互助会発行「契約施設旅行者取扱宿泊利用補助券」2,000円を2枚使用すれば「杣山」コースが1，100円でご利用になれます。

ご宿泊の方に限り、休憩利用補助券1，000円を売店で使用することができます！

詳しいお問合せについては　TEL：0776－77－3200 までご連絡ください。

バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。(http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html)

明日への学び　で検索してください。

ご意見をお寄せください。

住所 ：福井市大手 3-17-1

連絡先：福井県教育庁学校教育政策課

TEL ：0776-20-0295
FAX ：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp